

言葉の幸せ

忘れもしないあの日から五年以上の歳月が過ぎた。

「逃げよう、父さん」

「母さんも一緒に、逃げよう」

東日本大震災発生の翌日、親戚のおじさんが大きなトラックにいっぱい荷物を積んでやってきた。「今ならまだ間に合う」「命さえあればいいんだから」「恥ずかしいことはない」「みんな連れてってやる、一緒に逃げよう」

苦しい、息の詰まるような時間が過ぎた。半壊した家の戸口で父は呟いた。

「俺は行けない」

「母さんも行こう」妹は泣いていた。

「ごめんね、行けない」

たくさんの患者さんを置いては行けないという意味だと感じた。心の底から父の医師という仕事を恨んだ。近くに葉を出せるところも、病院も、壊れてしまった。クリニックを営む父は、患者さんからも、自分自身からも逃げられなかった。そして母も、父に付き添った。私と妹を乗せたトラックが走り出そうとした時、父は半分に空いた窓から静かにある言葉を伝えた。

「お前は生きろ。妹を頼む」

後のことは覚えていない。私と妹は逃げた。

あれから長い月日が経った。幸いにも私の地域には二次震災は訪れず、家族は生き延びた。澁刺であった父の髪には白いものが混じるようになった。多くの人の協力により街は復興し、人も戻ってきた。きれいになった建物から震災の悲しみを思い出すことはもうないだろう。記憶はゆつくりと遠のいていく。けれども私はあの時の父の言葉を忘れることができない。言葉に魂が宿るとき、その言葉は永遠となる。

以来私は、人の悪口を言うことをやめた。言葉を使うとしたら、その言葉は誰かを勇気づけ、励まし、支え、信頼するために使いたい。言葉に宿る小さな命を幸せにしてあげたい。